「隅田川続俤」の法界坊

大阪芸術大学　文芸学科　教授　出口 逸平

「隅田川続俤」は 1784（天明四）年 4 月大阪角の芝居で初演された。作者は奈河七五三助ほか。滑稽かつ野放図な法界坊の姿が評判となり、現代まで繰り返し上演される人気演目となった。

いったいこの「悪の道化」は、どのようにして生み出されたのか。今回は紙幅の関係上、初演にいたる経緯を中心に考察してみたい。

1　法界坊の由来

近松門左衛門の浄瑠璃「双生隅田川」（1720 年初演）は、舞台上に同じ姿の人物が二人現れる双面（ふたおもて）の趣向や、鯉魚の一軸、女船頭といった点で「隅田川続俤」に連なる重要な先行作品だが、ここに法界坊も登場する。彼は「狂女」となった班女を伴って東下りする山伏であり、能のワキ僧にあたる。ただし神仏の霊験を語るその言葉は「釈迦は羅喉羅の親父にて。布袋は唐子のお乳母役。閻魔は鬼の旦那也。扨日の本の我先祖。役の行者と申するは悪鬼悪魔の虫薬」と祭文のもじり・パロディであり、自らを「すたすた坊主」（「すたすた」で始まる文句を歌い踊る乞食坊主）と称するごとく、その役割は謡曲「隅田川」の悲劇を一時緩和するコミック・リリーフにすぎない。したがって滑稽ではあっても、「隅田川続俤」の法界坊のような残虐悪徳のイメージはない。

渥美清太郎は常磐津浄瑠璃「江戸名所都鳥追」（1765 年初演）について「法界坊（初世中村仲蔵）といえる滑稽なる坊主交りて、軽きおかしみの踊りあり」（「『法界坊』系統記」）、また続く富本浄瑠璃「都鳥春錦絵」（1771 年初演）も「舞台は隅田堤の花盛で、爰に吉田松若丸と照天姫の道行があつて法界坊といふ坊主が搦むんですが、この法界坊は執念深い悪僧ではなく、いはば法印といつたやうな軽い滑稽な役でして」（「法界坊の変り種」）と評している。

2　大日坊の由来

当時の演劇界でこうした「悪」を体現した堕落僧は別にいた。それが大日坊である。

大日坊は、平安末から鎌倉初期に実在した大日房能忍という禅僧をモデルとする。「本朝高僧伝」（1707 年成立）巻十九「摂州三宝寺沙門能忍伝」には「釈能忍。号大日。平家士将景清叔父也」「一夜景清訪来。忍喜其邂逅相逢、使弟子需酒於杏家。景清疑告事於官府、乃揮剣刺殺而去」とある。すなわち大日房能忍は景清の叔父にあたり、密告の疑いから景清に殺されたと記す。「摂陽奇観」（1833 年頃成立）巻之一「北埜銭観音」も「伯父大日坊是を支えて却而擒にせんと謀る故に、止ことを不得して伯父大日坊をうち、これより悪の字を冠しめ悪七兵衛景清と呼ふこととは成れり」と奸計を企んで景清に殺されたとある。

この逸話ゆえに、大日坊は「景清もの」にたびたび悪役として登場する。たとえば常磐津浄瑠璃「残雪曽我」（1762 年初演）では「いすり坊主出て、虎をせちがふを出て見れば伯父の大日坊。訴人せんとの悪ねだり（略）いよいよ大日坊悪心ゆゑ、是非なく切殺し」（「歌舞伎年表」第 3 巻）、同じく常磐津の「垣衣恋写絵」（1775 年初演）でも「大日坊お染久松を打擲する所にカケつけ、支え、大日坊を殺し」（「歌舞伎年表」第 4 巻）とあるように、「景清もの」のなかで大日坊はもっぱら敵役の悪僧として描かれてきた。

ただし悪の大日坊と少し違うニュアンスを見せたのが、浄瑠璃「壇浦兜軍記」（1732 年初演）である。敵の岩永左衛門との密談を、景清に立ち聞きされた大日坊は「俄に仰天顔」でしどろもどろに弁解する。隙を見て騙し討ちを謀るも失敗し、「叔父ながら実の入つた悪人ぢやの」と罵られ、最後は景清に首を落とされる。つまり悪党ながら滑稽さの加わった大日坊の姿がここに垣間見える。こののち「色模様青柳曽我」（1775 年初演）や「江戸名所緑曽我」（1779 年初演）で、大日坊がどのように描かれたかは気になるが、残念ながら台本がなく、詳細は不明である。

3　新たな法界坊

こうして滑稽な法界坊と強悪な大日坊の二人を取り込んで、新たな法界坊を生み出した最初の作品が「隅田川続俤」である。

法界坊は金と色欲に執着して、永楽屋の娘おくみを追いかけ回すが、劇の前半では自分の書いた恋文を暴露されたり、重い葛籠を持ち上げようとジタバタするなど、ドタバタ喜劇さながらの滑稽さを随所に見せる。

ところが後半では、おくみの恋人手代の要助（じつは吉田の松若）をしばりあげ、おくみの父親や松若の許嫁野分姫をなぶり殺しにする。とくに野分姫には「われが惚れて居る毛二才め（松若）が、おくみと夫婦になる邪魔になるわれぢやに依つて、殺してくれいとおらは頼まれたのぢや」と嘘をつき、野分姫の嫉妬心を煽り立てた上で殺害するという悪辣さである。その直後に自身も殺されるが、「魂は冥途へ赴くとも、魄はこの世に留まつて、恋しと思ふおくみに附纏はで置かうか。ヲヲ迷うた迷うた、迷うたわいやい」と法界坊は亡霊となって再びおくみの前に現れる。このようにコミカルさとグロテスクさが交錯する独特の演劇空間が、法界坊を中心に生み出されている。

さらに本作の最後には「垣衣恋写絵」が置かれ、舞台上に二人のおくみが現れる（双面）。そして偽のおくみこそ、じつは法界坊と野分姫の亡魂の合体であったことが明らかとなる。

堕落僧の恋着や双面の趣向は、浄瑠璃「一心二河白道」（1673 年初演）以来の「清玄桜姫もの」や近松門左衛門の浄瑠璃「赤染衛門栄花物語」（1680 年初演）の大信赤染衛門の例があるが、本作の法界坊は野分姫と合体する形をとり、より一層破天荒な造形となっている。その効果や意味については、稿を改めて論じることにしたい。